

電気魚のなかで

駅のホームに立って、向かい側に細めた目を投げているかれは、自分のことを少年だと思っている。いや、自分のことを少年だなんて思いたくはなかった。かれの手足は自分でも分かるくらい、ずいぶん伸びてきた。秘密のものを隠すために部屋の箆笥を開けたとき、かれは二年前まで自分が穿いていた小学校の制服がたたまれているのを見つけた。その短パンを広げたとき、こんなもん穿いてたんだ、とかれは驚いた。秘密のものを隠すかわりに、ユニクロのジーンズを脱ぎ、誰もいないのを確認してそれを穿いた。ソフトテニスの練習で真っ黒に日焼けした膝小僧の少し上に、真っ白い腿が出ている。短パンはだいたいぶきつい。太ったつもりじゃない、自分は太ってない、これは成長のあかしだ。脚の白さが目にまぶしかった。

球拾いに飽きてコート脇の草を筆っているテニス部の友だちに聞いた。「シゲは自分のこと、少年だと思う？ 青年だと思う？」

友だちは草を筆る手をとめて、眉根に皺を寄せ、口の端をもちあげながら言った。「青年やね。中二ともなればみんな、青年でしょ」

こんなこともできるしな、と友だちは脚を大きく開いて、頭を前に倒し、自分の下腹部に丸めた口を近づけて、ショートパンツの上から、上下運動させてみせた。蜘蛛のように見えた。身体のかたいかれには、それはできなかった。シゲがかれの耳に顔を近づけてきた。吐息が耳にかかった。

「あそこの毛も、ボーボーやしな」

ボーボーやしな、といわれた瞬間、かれの背筋を少年が突き抜ける。

かれは塾に行くために毎週火曜日と金曜日に電車に乗っている。鞆は重たいが、その鞆が、自分の今の成績を証明するもののようにかれは思う。中間試験では学年内一桁の順位を取った。

近くのベンチがあいているが、座る気にはならない。かれはポケットに手をつまむ。右足に体重をかけて、顔も斜めに傾ける。右目を閉じ、細めた左目で世界を見る。世界は平たい。向かいのホームの屋根が光を受けている。屋根の下、サラリーマンはネクタイで首をしめている。あんなに禿げたらいっそ剃り落とすべきだろうとかれは思う。バレンタインデーの包装紙のような、緑と赤の、チェックのスカート。高校生女子の肉づきのよさ。太ももの弛みが見えとれる。階段をのぼってホームに立つと、後ろに後ろにくっついて並ぶ人間。

滑り込んだ電車を、かれはこっそりと、巨大な魚にたとえる。

穴ぐらに頭を突っ込む電気魚。身体中の皮膚を次々に開き、すっかり吸いつぶした人の群れを吐き出す。そこにはまた新たに電気魚に食われるのを待っている人がいる。こぞって魚の体内に吸いこまれていく。電気魚は穴ぐらから、次のえさ場を求めて擦過音を立てる。

そのような姿にたとえることは、友人たちには内緒だ。かれは世界を見つづける。右足にかけていた体重を、左足に変える。見つづけるのは、見られているような気がするから。

見られている。他人の視線を感じる。人間の目がすべてかれを見つめる小さな覗き窓のように見える。自分の目はどうして前しか見えないのだろう。横からも後ろからも見られているように思う。せめてこの成績が見え

ればいいのに。この鞆の重たさが、見えればいいのに。かれは見られることとの理不尽に堪えがたく、せいっぱい意識を広げる。見られることによって生じるものを、見ることで塗り重ねようとする。ただし全力で見ているなんて思われてはいけない。全力は、かっこ悪いことだ。だからかれの両まぶたは、太陽の光のまぶしさに目を細めるのに見せかけて、開いているのが分からないくらいに閉じられているのだ。べとついた額をぬぐう。汗が水玉になっている。手ぐしで髪の毛を後ろに流すと、爪に湿っぽい垢がたまった。消しごむのカスでするように、垢をねじって落とす。

今日のヘアスタイルはキマらなかった。かれはいつも髪をたてて、ハーンドのワックスをつける。しかしかれの髪はやわらかく、すぐにへたる。前髪の一部が外側にカーブして、クエスチョンマークをひっくり返したようになっていて。もちろんかれにはそれは見えなかった。だがどうせそんなところだろうと思った。手鏡を持ち歩いて確認しなかったけれど、手鏡を持ち歩いて見つめているところを誰にも見られたくない。だからデパートのエスカレーターや、クリーニング屋の柱や、窓など、自分のすがたがうつりこむところがあれば、すかさず見る。見ていることを見られないように絶妙のタイミングを見計らって。そういうとき、大体自分の髪の毛のままならなさに、かれは憤りを覚えて、手ぐしで何度も毛を掻くのだった。かれの乗る電車がホームにやってくる。かれの乗る電車は、餌を呑みこむために皮膚を横開きする電気魚にはならない。電車は、かれが見ている数分の間だけ、彼岸のホームに限り、魚に変貌するのだ。

「あいつ乳おっさいよな」

テニス部はあぐらをかいて乳談義に花を咲かす。「ブラジャーが透けとるんがなんとも、いえんねえ」ひとりの部員がソフトテニスのボールを指で揉みしだいている。指先でつまんだり、「ぎゅっ、ぎゅっ、」真顔でつぶやきながら握りしめたりする。「白い制服の背中に、ピンク色の線がついとるんですよ」かれはひとつ後ろの席から、あいつのピンク色の線を見る権利を与えられていた。家に帰ってそれを思い浮かべながら何度もノートに描いた。「でもあいつ」フクヤンがボールを防球ネットに投げつけた。「大沢と付き合つとる」一拍置いたので、言葉が宣告めいた響きで場に落ちた。大沢とあいつが昼休み、芸術棟の冷たい廊下に、もたれて並んで座っているのをかれも目撃していた。人通りの少ない三階の渡り廊下を、手をつないで歩くのも見た。「乳揉みてえ」「揉み揉み」「ぎゅっぎゅっ」「てめえら練習サボンじゃねえよ!」先輩らの飛ばしたボールはシゲの背中に当たり、真上に高く飛んだ。シゲは胸を反り、「いちち、ちちっ、ちちっ」と言いながら跳ねてまわった。かれは走りながら、並んで座っていた二人の、恋人の瞬間を思い描いていた。

「好きなやつ、おるんやろ、誰よ」

「それが、いないんやって。コーノはおるの」

「おれ川田」

その類の質問に友だちがあっさりと答えること、自分がその質問についての答えを、首を振ることによって秘匿すること、かれにはその違いがよく分かっていて。コーノは川田に告白する段取りを、フクヤンやシゲと、こっそり相談している。自分には一体何の段取りがあるんだろうかとかかれ

は思うのだ。それにいかにも現実じみてないのが分かっている。

何しろ、乗りこんだ電車の、同じ車両にいただけの、名前も分からないような女子だからだ。

電車のなかで、ポケットに両手を突っ込み、かれはまた右足を軸に、こころもちからだを傾けている。遠くを見るように見えるような目で、何人かの客の肩の奥にいる、その女子を見つめている。

かれは自分に問いかける。今、どうだ？ アゴは引いた方がいい。制服のシャツの、一つ目のボタンは開けておいた方がいい。襟の校章は取れていた方がいい。髪の毛は？ たぶん、逆クエスチョンマークだ。かれは手で髪の毛をくしゃくしゃにかきまわし、無造作へアに見せようとする。

女子の制服は高校のものだ。窓からの光が女子に降っている。三角形の襟元に走った数本の白いライン、女子の着る濃紺のベスト、青いチェックのスカートが、もうずいぶん暑くなる初夏の空気を、オレンジの涼しげな風に変え、女子のまわりをやわらかに吹かせているようにかれには見える。きつと背中や袖の汗ジミとは無縁だろう。首まわりの黒い汚れを女子は経験したことないだろう。女子の髪は肩をこえない。少し茶色が入って、内側にゆっくりカールしているのが、同級生たちとちがうところだ。

同級生とその女子高校生を、かれはくらべる。近ごろ化粧つ気の出できた、同級生の女子たち（たとえばあいつ）は、いつも黒い髪の毛を、ストレートパーマをかけて、どすと、まっすぐ落とす。うねったままにしているものもある。耳の下で強引にまとめている髪の毛の、ちぢれる様子を見たとき、女子も自分と同じように、ままならないのだろうと思って、笑いたく

なることがある。ままならないから、気に入らないから、化粧つ気のある女子たちは、美容院を見つけて、まっすぐ針のように髪を伸ばすのだろう。

手鏡を持ち歩いて、自分の髪の毛の流れを確認したり、リップクリームを塗ったりするのだろう。高校生女子のカールは、たしかに作られたカールだが、それでいて自然な曲線であるように、かれの目にはうつる。そこに崩れる様子を見出せない。ままならなさなど無縁に思われる。それを垢抜ける、と世間では言うことができるのかもしれないが、まだ中学生のかれに、その言葉は浮かばない。

女子は軽そうに見える鞆を肩にかけて、いつも文庫本を読んでいる。赤とクリームがかかった白の、アーガイル模様の入ったブックカバーをかけているので、本の題名はかれには分からない。かれはそのひし形をいくつも並べた模様を引きつけられる。カバーの奥の、本の題名を知りたい。

三駅乗って先に降りる生活を春からずっとつづけてきた。女子はかれの乗る三両目に、すでに乗っていて、かれが降りてからも乗りつづけた。かれの降りる駅名がアナウンスされる。開いた扉から降りる。外の空気は日々湿気を含み、重たさを増している。かれの制服はたちまち汗を思い出してくたびれる。扉がとぎされ、冷気が遮断され、窓際の女子はその向こう。

かれは歩き始め、女子を視界のずっと後ろに追いやっているのだが、やがて電車がゆっくり追いついてきて、いつもかれを抜き去るのだった。窓の奥にたしかめる女子は、変わらず、本に目を落としている様子だ。

テニス部が外周を終えて帰ってくると、剣道部の女子部員が、テニスコートと隣り合った武道館の前で休んでいた。かれは一人遅れて帰ってきた。

外周の途中でカナヘビを見つけたかれとシゲは、二人でコースを外れて、カナヘビを追っていたのだけれど、いつの間にかシゲ一人、コースに復帰していたのだ。学校の周りを走る七百メートルのコースを十周。一番長い裏門側の直線の果てには、一人の部員もいない。かれは焦ったけれど、ペースは上がらなかった。靴の裏がこすれて反響した。半分つぶされたミミズを七回、八回、九回と焼けた路上に見るたびに脚は重くなった。

「久しぶり。元気―？」

武道館の前にやっと着いたかれに声をかけたのは清水だった。清水は剣道部の道着を着ている。「清水」と大きく書いてあるから、一年ぶりの再会でも間違いない清水だと分かった。「うん、清水さんは」髪が伸び、眉がそろったけれども、つやのある、厚ぼったい唇は変わらなかった。かれは唇を、清水を記憶する材料にしていた。「わたし、元気だよ」

「久保君、なんか変わったんちゃう」

「えっ、どこが」

「背え伸びてすっきりしたやん。わたしと目線同じになった」

タオルで汗を拭いている清水を見つめるかれの頭からは、テニスの練習メニューや外周の疲労感など、ほとんど吹き飛んでいた。かれの身長はたしかに一年生のときから十センチ伸びた。それを言おうか迷った。

「男子はええなー。じゃね」

かれは女子の一言、二言に、**もっていかれる**。心臓がするつと抜け出して、なかから破裂しそうに躍っている。さしだされた言葉を、かれは熱い舌で転がす。舐めるように味わう。元気―？ すっきりしたやん。ええな

ー。じゃね。武道館に入っていく清水の姿をかれは歩き出しながら追っている。今まで意識してなかったけれど、清水のことを好きになってもいいかもしれない、とさえ、かれは思う。清水の唇が、かれの頭のなかでは、もう記憶のなかの唇とはまったく別のものとして動き出している。赤みのある、なめらかな唇。合わさり、離れ、またびつたりと合う唇。唇の内側にある白い、揃った歯。それが自分に向かう瞬間を、かれは思う。けれど清水はキヨタカと付き合っている。そして自分は**少年**だ。

テスト週間のような、早く帰れる日や、休日、自分の時間を持て余したかれは、上へ上へそそり立つように伸びる細く白い斜塔の下の、なだらかな地平を見ることに執心する。カーテンをしめて、部屋の鍵もしめている。母親は買い物、妹は遊びに出かけているから、誰にもとがめられる心配はない。家のなかに誰かの気配のある日には、かれは**それ**をしない。

絨毯の上に脱いだジーンズが、まだ、ぬくみを放ちながら萎れている。かれはその上にトランクスをのせる。ふくらんだ。ペニスが、トランクスの上からもよく分かっていた。

ベッドに腰をおろすと、シーツの冷たい感触が、尻から伝わってくる。自分が今、異常なことをしているのだ、という認識が、その冷たさと直結する。クーラーの運転する音がかれの耳に聞こえる。

ふくれ上がった。ペニスの先に赤みがさしている。今の状況に自分が興奮しているのが分かる。しめたカーテンの向こう、斜向かいの家の二階には、同級生の女子の部屋がある。その女子は皮肉屋の評判で男子から嫌われていたから、かれも嫌っていたが、その女子が夜でもないのにカーテンをし

めて奥で何かこそやっている自分をどう思うだろうと考えた。今、いるだろうか？ いるかもしれない。何かを誰かに言うだろうか？ ……冷たいシーツの上の、かれのからだがふるえる。それでもかれは観察を止められない。手鏡を持ち出して、じっくりと見つめる。目の存在をかなぐりすてても行動せざるを得ないような、熱い衝動に満たされている。

少年だ。シゲのようにやわらかく丸まるからだではないから、無理してのぞきこむしかできない。手鏡の角度を変えて、何度も確かめる。かれが半ば習慣づけた、この行動の目的は、ペニスの根元に生える陰毛を確認することにあつた。勃起は必ずしもかれの望むところではなかったが、かれは、勃起もまた、観察対象とリンクする重要なことだと考えていた。

ペニスの根元には、いつ観察しても、一本も毛が生えていない。のぞきこんでようやく、白い産毛のようなものが、やわらかく、短く生えているのが分かる程度だ。

かれはまだ射精を経験していない。友人が、肩をたたきあつて、「パンツ、ぐしよぐしよになるんよな」と言うのを、はじめ、中学生にもなつておねしよをしたんじゃないかと笑つたくらいだ。

「なあ、クボっち、いいもん見せてやっけん」小学五年生のとき、ある友だちが、かれを誘つた。「なん？」こつそりと耳打ちするように誘われることが、かれには嬉しかった。友だちはかれをトイレに連れて行き、小便器の前に立つと、「ほら、見てんか。おれ、こんななんだよ」と、笑いかけながら、毛の生えたペニスと、ぶらさげた二つの袋を指して見せた。小便器とからだのカゲになって、それは黒々とし、大きく見えた。「へえ」すごい、

と思つた。「おい、あんま見んなよ。なあ、クボっちはどうな？」「ぼくは、ちやうよ」「そっか」かれは尿意を催していたけれど、そこで小便をする気にならなかつた。

いずれ自分もそうなるんだろうとはまだ思えなかつた。だが中学二年生になつてもまだ、かれは自分が毛も生えない、パンツをぐしよぬれにしたこともないような少年であることを、許しがたく思っている。あの友だちは、自分が毛の生えていない子どもだということを分かつた上で誘つたに違ひなかつた。窓からの光を背負つた友だちの顔をかれは今でも思い出す。友だちは、自分の成長の遅さを、あのとときすでに予知していたんじゃないか。あの笑顔が、自分のペニスの根元から、毛の生える資格を失わせたんじゃないか。

観察を続けていると、決まつてかれのペニスの先からは、カウパー液が出た。かれは、透明なその微量の液体を、指でぬぐいとつて、親指と人差し指の間で、何度もくつつけたり、はなしたりしてみる。納豆のように、それはうすく糸を引き、見つめるかれの指の間で、何度ものびるのだった。

高校生女子の制服が白くなった。

日曜日の一日練習ともなると、テニス部員は木陰に入り浸り、凍らせてきたポカリスエットをだらしなく飲みつづける。ペットボトルをタオルでくるみ、額に当ててうなだれる。「魔界村マジで鬼畜」「んっ」木陰の砂だまりを細い木の枝でいじり、絵を描いている部員の横で、ゲームの話が始めるのがある。「アーサー、すっぱだから、かわいそうやっつて」ペットボトルのキャップを取つて、口に突つ込む。「ダメージ食らつたら、鎧が脱げる

んよな。あれどいう仕組みなん」「セロテープでくつつけとんちゃん」「おっぱい」砂に描いた曲線ふたつの上に、大きさの違う二つの石が載せられる。「右の乳輪、でかっ」キャップが回される。かれは二人の会話を、少し離れた木陰から、笑って聞いている。

二人のなかに入って行くことはしなかった。かれは頭のなかで、魔界村というゲームの主人公らしいアーサーという人物の、すっぱだかになったすがたや、砂に描かれたおっぱいの形を想像した。友人たちの世界を想像しつづけながら、かれは一人でこっそり笑った。そういうことはよくあった。部員はかれの分からないゲームの話ばかりする。馬鹿だな、ゲームばっかりやってるから、成績が伸びないんだろ？ 友人たちの話に笑いながらも、かれは思っている。おれは、そこには入らないよ。

ふだんのように高校生女子が窓際で本を読んでいるのを確かめると、かれはその電車に一両後ろから乗りこみ、前へ向かって、落ち着けるところを探すように、ゆつくり歩いて行った。みんな座り、まだ席が余っているような状況で、立っている二人をさえぎる乗客は誰もいない。

女子の髪の間から、やわらかく、弾力のありそうな首筋が見えている。シャツの背にブラジャーの線がついている。色が透けていないから、白だろう、かれは見当をつける。背はかれの方が少しだけ高い。まだ居場所が決まらずに歩いているそぶりで、近づいていく。かれは何とか女子の読んでいる本を確かめようと首を伸ばす。字だ。字が詰まっている。見開き二ページ、小さな字のかたまりで紙面が染まっている。ただ日光が当たり、ページの上のタイトルは読み取れない。ひらがなと漢字のまざった題、と

いうくらいしか分からない。

かれは歩みを止めてはいけなかった。女子の首筋に、息がかかるようなことがあってはいけなかった。女子が気配を察してかれを振り返るようなことがあってはいけなかった。座っている乗客が、かれの挙動に注目するようなことがあってもいけなかった。

電車の揺れに逆らうように、かれは歩き去る。そのまま、その車両に居座ることはできない。かれは目の奥に、女子の首筋と、字のかたまりを残したまま、次の車両へわたっていく。

ひとりの、背の高い**青年**が、かれの靴の先から静かに歩いてきて、かれのからだど交差し、女子のいる車両へ歩いていった。高校生のものらしい制服を着ている。

かれはその青年の像を、強く意識し、はっとする。

ああいう人のことを青年というんだ。

青年の髪の毛は、左に向かって緩やかな流れになるようにまとめられている。前髪は目にかかるようでかからず、毛束になっている。背は百九十センチ近い。切れ長の目をしている。まぶたの下で、意思をもった瞳が前を狙っているが、口が大きいので、全体の印象は鋭すぎない。顎は細い。肩幅が広く、がっしりしている様子だが、胸板は厚くない。下半身も細身なので、縦にのびた一本の直線のように見える。

かれは青年を振り返る。連結部の近くに立つことで、次の車両からでも二人の動きを観察することができた。青年は歩きやめ、女子の近くで、吊革をつかんでいる。どうしてそこで？ 女子は意に介さない様子で読みつ

づけている。青年は制服の尻ポケットに手をつまむと、本を取りだした。ポケットのなかでくたびれてしまった様子だが、本の間に挟んでいた葉を外すと、片手につかんで読み始める。なんで本を？

かれは二人の挙動を追いつづけた。追いつづけなければいけない気がした。そうしなければ、何かとんでもないことが起きるんじゃないか。何が？何か……とんでもないこと。それは天啓のように、かれには思われた。

ひとつひとつ、細かい動きを、かれは見つめる……青年が吊革を離して腕をおろす、女子が本のページをめくる、青年が手を口にあてて咳げらをする、女子がずれてきた鞆を肩にかけ直す。次の駅で入ってきた客が二人を見えなくするが、新しい客がすっかり座ってしまっても、変わらず元のまま本を読んでいる。二人が、一つの絵のなかに、当たり前のように、しっくりおさまっているように感じられる。

かれの降りる駅が近づいてくる。

床におろしている鞆には、塾で使う本が詰まっている。どうする？

自動車整備工場を過ぎると、電車は住宅街に隣り合う。よごれたベランダにつられた物干し竿の先で揺れる洗濯物や、窓の奥にあるテレビ、座っている老人、くすんだ色の木造住宅の壁を、いくつも見ることができるようになる。かれの降りる駅、向かうべき塾が近くに迫っている証拠だ。

ブレーキがかかる。うねり、傾いた車体のなか、二人の姿が視界から消える。電車はより狭まった家々を分け、鋭く軋みながら、目的へ、強い力で走り続ける。吊革をもつ手が汗ばんでいる。かれは車体の傾きに抵抗し、一歩前に踏み出し、視界を確保し、二人の姿を追うこともできた。け

れど慣性に従い、カーブの外側に、胃や、腸や、左足、右足、最近ようやく筋肉が盛り上がるようになってきた腕を傾け、振らせたままでいるしかできない。全身で受け止めるブレーキの反動、耳を突くレールとの摩擦音、火花を散らせる音が、駅のホームに入っていく、おさまるところにおさまっていく電車の、最後のあえぎに思われる。カーブが終わり、かれの視界に、先ほどとまったく変わらず読書にふける二人の距離がうつるとき、電車はまた緩やかにスピードをあげている。どうする？

何をどうするっていうんだろう。そもそも同じ電車に、たった三駅、いっしょに乗り合わせるだけのつながりに過ぎない。年齢も違う、目的地も違う、学校もどこか分からない、名前も分からない。そもそもかれには、女子が読んでいる本のタイトルすら分からない。

かれが持ち歩いている本は、A4判の黄色い問題集が三冊、塾の作った参考書二冊。その参考書の余白に、かれは塾の講師の似顔絵をいくつも描いて残している。ビルの七階の一室に市内各地から集まった八十人が詰めて座り、同じ問題集を開く。窓の外が紫色に変わる。誰ひとり喋らず、鉛筆の音だけが響き合っている。その音の中に、かれがいない。ふだんと違う色の景色、ふだんと違う色の陽が射し込む車内で、かれは一向向こうで開かれた二つの本が閉じられる瞬間まで、揺られつづけるのだ。そんなことがあるだろうか。鞆のなかには、塾で知り合った友だちに貸してもらった漫画本が三冊入っている。かれの鞆は重たい。

扉が開く。「車両とホームの間隔が、広くなっておりますので、お気をつけてください」鞆を持ち上げ、ホームに降り立つ。焦がされ熱の立ちのぼる

コンクリート。扉がしまる。かれが今、歩きだしている後ろから、二人を乗せた車両が近づいてくる。本を読んでいた女子が顔を上げる。一メートルも離れていない。が、その姿は、すぐに百メートル、二百メートルと、かれから遠ざかった。ふだん確認する女子のすがたを、その日かれは、横目に見なかった。あの青年の制服は、ひよっとして女子と同じ高校のものじゃないだろうか……うっすら浮かんだ思いつきは、そのまま塾まで、カゲのように、じれったくついてきた。

テニスボールが、高く張られた防球ネットをこえる。「おい、アホー」二年生のひとりがすかさず駆けだしていくと、後にぞろぞろ近づいていく。

「そんなに行かんでええわ！」フライをうちあげた三年生が叫ぶ。「あんアホども、ほっとけ」落ちていたボールを拾って、すぐにラリーを再開する。

大会が近いのだ。二年生のうちの何人か、フクヤンやコバは三年生にまじって練習しているが、かれを含めて部内順位の低い二年生は、球拾いをさせられている。

コーノがテニスコートの端の高い石塀をよじのぼり、向こう側に飛び降りるのにつづいて、かれも降りると、学校に面した狭い道路には、二年生がすでに三人座っている。

「あん先輩ら、威張りすぎじゃね」

「おれらが球拾いしてやっとするけん、楽しい仲良く球が打てるんやろ」

「うちの学校のコート、狭すぎるんよ」

もう一人降りてきた。ぜんぶで六人が地べたに座りこんで道をふさいだ。「おい、よう聞いてみ。ガンダムの声、ここまで聞こえとるぞ」につじゅ

く！さんじゅ！ たしかにかれの耳にも、ガンダムとよばれている、身体の大きい一年生の掛け声が聞こえてくる。さっんじゅいっち！ さっんじゅに！「あいつらもさあ、ずっと素振りばっかで楽しいんかね」「ガンダムまじめに振るよなあ」「あいつが声かけて振ると、みんな振るよな」

一年生は、こんな風に塀の向こうにかたまることはない。ほとんどの一年生は、この、自分らの背より高い石塀をよじのぼって越える筋力がまだないのだ。二年生は、こういう機会があると、いつも我先にと塀に飛びついた。「フクヤンは、部長に取り入るんがうまい」「はっ、」「大してテニスうまくないんにな」シゲがにやにや笑って、塀を蹴飛ばした。路上に、ターン、と音が響いた。よっじゅご！ よっじゅるおーく！

「あいつら引退したら、おれらも威張ってやろうぜ」
二年生がまた塀に飛びつき、渾身の力をこめてよじのぼり、戻っていくと、ガンダムの声はなく、テニスボールも飛んでいない。コートは空いていて、部員はみんな、武道館側の入り口に集合している。高校生のOBが数人来ている。

「球拾い、行ってきました」

二年生が近づいていくと、部長がOBに笑いかける。「こいつら、練習サボって、遊んどるんすよ」

「馬鹿やろ、お前らもそうやったやんか」

「おっ、おれ遊んでねーし」

OBが蹴りを入れると、部長は「うっひ、すんませっ、」と笑って頭を下げた。かれはたしかに一年前、今のガンダムたちのように素振りに勤しん

でいるとき、部長たちが、砂に絵を描いて笑っているのを見たことがあったのを思い出した。三年生たちは体育座りをしてOBに頭を下げている。

コートはOB対全部員になった。かれはサーブがひとつも入らない。ようやく入った下からのサーブは、ラインぎりぎりに引っぱられた。

「おれのラケットやるよ。五百円。安いやろ」

かれが五百円を出すのを受け取ると、おもむろにOBはラケットのガットを抜き取り始めた。

「これ、まだ使いたいけんなあ」かれの目の前で胡坐をかいて、時間をかけてすっかり抜いてしまった。練習の合間にトンボをひっぱたくのにも使えないようなラケットを渡されたかれは、ただ笑って「ありがとうございしました」と言った。「うん、まいど」

ラケットに新しいガットがはられることはなかった。かれはその交渉を家族の誰にも言わず、クローゼットの奥に隠して、見ることもなかった。

バドミントン部の友だちと連れ立ってトイレから出てくると、女子が二人、目の前に立っている。一人が顔を伏せて、掃除道具入れに隠れるようにしている。そのしぐさのわざとらしさのおかげで、かれにもそれがどういふ種類の「立っている」なのかが分かった。

近藤……その女子は男子の間ではあまり話題にならず、小学生のときには「ネクラ」「地味」と笑われたこともあったが、たしかに中学生になって、髪の毛や眉をととのえたり、鏡を見たりする女子になっていた。

かれは近藤の目が、こちらに注がれているのがよく分かった。トイレから出た瞬間、かれは、視線が、まるで目に見える糸のように、けれどちぎ

れそうなほど弱々しく、その場に張られているのを感じた。ただしそれに触って、交渉するのはかれではないこともすぐ分かる。温度の違う他人のための、他人の糸だった。

「オザ、おれ先行くよ」

かれは肩を叩いて、友だちを残し、教室に歩いた。女子二人は、かれを見向きもしないで、友だちの反応を待っている様子だった。

自分は見られさえもしていないのかもしれないと、かれは歩きながら思った。教室のそこらに男子たちの集まり、女子たちの集まりが散らばっている。かれはその集まりを避けて歩くしかない。

集まりの中に入っていくことができない。元々入ることのできる集まりも限られている。その集まりが、女子からどう見られているのかも、考えたくないけれど、分かってしまう。かれは自分の席に座り、読みさしの本のページを開いた。魔法を使い、七人の、竜と呼ばれる賢者と契約する、軽いファンタジーだ。字は詰まっていない。

「小説読んでるから忙しいんだよ」

趣味の模型飛行機飛ばしに付き合わせようとする父親の誘いを断るのに、かれは、小説を読む、を使うようになっていた。

「小説か、どんな本だよ」

かれはブックカバーのついた、その小さな活字の本を、父親に手渡す。

父親は、しばらく本をめくって言った。

「うん、勉強だな」

ともかく父親の誘いを振りきることはできたのだが、そのときは喜んだ

かれの耳に、勉強という言葉が、今、まったく別の意味で響いている。父親は、どういう意味で、勉強という言葉を使ったのか。この小説を、どう読んだのか。それをかれは言葉にすることができない。ただひとつ、かれに感じられるのは、今、自分の席でこうして、この小説を読むことが、たまたまなく恥ずかしくてしようがないということだった。

かれは本を閉じ、机のなかに隠した。ブックカバーをかけていても、もう数カ月経ったこのクラスなら、誰が見たって、自分の読んでいる本の中心くらい分かってるんだろう……かれは意識する。それは決してはじめての意識ではない。

机の上にならずくまったかれは、オザと近藤の告白シーンを頭に思い描いた。オザと近藤が、前の席のあいつのように、恋人同士、仲良く手をつないで歩いたり、ひとけのない廊下で、寄り添い、うずくまったりしているところを想像した。

青年があらわれる。女子があらわれる。二人が電車の同じ車両で、本を読みつづけている。片方は通路の中央で吊革をつかみ、尻ポケットから出した、くたびれた本を片手で開く。もう片方は扉のそばにもたれかかり、窓の外の光を浴びながら、文字をたどっている。二人の周りに立っている者はいない。字の詰まった、かれには分からない本の世界が、二人に開けている。女子の持っている本の字が抜け出して、光る埃のように宙を飛び、青年の持っている本へ入り込む。青年の持っている本からも、字が飛びあがる。たちまち、二つの世界を作る字と字が手をつなぎ、青年と女子の時間が共有される。今なに読んでんの。うん。たったそれだけの会話が、小

声でかわされる。かれらの距離は、一向に詰まっていけない。元のままのすがたで、誰からもうつっている。けれども、もうつながっているのだ。誰の侵入も許されない、字の連絡。

ふいに二人が顔をあげる。揃ってこちらを見る。かれはその目に射貫かれる。二人の顔は、眉も、唇も、まるで動いていない、けれど、覗き見ているかれの全身を見通す顔だった。二人はまた本に目を遣った。電車は動きつづけている。カーブによって視界から消えた二人が、再び戻ってきて、もうそのすがたが崩れることはない。

かれは自分が電気魚のなかにいることを意識する。穴ぐらに頭を突っ込み、人間を吸いつぶしては吐き出す電気魚だ。何が電気魚だ？　かれは電気魚のなかにいる。吸いつぶされて吐き出される。空想のなかで、人間などいくらでも吸いつぶされていけばよかった。

父親が以前、かれにチャップリンの「モダンタイムス」という映画を見せた。チャップリンは機械の気まぐれで歯車に呑み込まれ、あわや噛み砕かれる。それを見て笑ったかれは今、自分を見て笑う者なんて誰もいないことに気がつく。自分は人から見られていない。電車に乗り込む人間たちは、逆クエスチョンマークの前髪をした自分を見ても、どうも思わない。

かれはそれでも電気魚の体内にいつづける。かれは眠りが自分の意識を妨げるまで、きつく瞼をとじて、机の上にならずくまりつづけたようとした。

かれにはものすごく長い時間が過ぎて、次の時間のチャイムが鳴った。

風呂場でかれがタオルを泡だててこする。ペニスの根元に、毛が一本見えなかった。泡にもまれるその毛は明らかに産毛ではなく、指でつまんでも抜けな

い、確かな陰毛だった。いきなり生えてきた、とかれは思った。あんなに観察していたはずなのに、出てくるのはとつぜんだった。

「お祝いしなきゃ」

「あなたのお母さんも、これくらいの時期だったけんね」

台所にいる祖母と妹、母親の会話が開こえてくる。「赤飯炊こうか」母親が、ダイニングテーブルの上で宿題をする自分を見たのが、かれには分かった。かれはむろん女子が大人の身体に近づくその現象のことを、保健体育や、同級生の会話で知っている。二つ下の妹がはじめて股の間から血を流すのと、ほとんど同じ時期に、自分は毛を生やしたんだ、と、かれは塾の問題集を文字で埋めながら、つよく思った。けれどかれは自分のからの成長を、誰にも伝えることはない。その日、家族は赤飯を食べた。

女子が青年と同じ車両に乗り合わせることはたびたびあったが、そうでもないことも多かった。かれ自身、女子と同じ車両に乗ることが減っていた。それはかれにとって、説明をつけようにもつけられないことだった。

かれは女子と同じ車両、つまり女子のいつもいる三両目に乗らず、二両目や四両目や五両目を選ぶことが次第に多くなった。ただ、三両目を避けているわけでもないのだった。

向かい側のホームにランドセルを背負った小学生が入ってくる。小学生が視界に入るのはめずらしかった。男子同士で二人、手をつないでいる。ひとりのサラリーマンが列の先頭でうずくまっている。左腕に外したネクタイと、背広を抱えながら、下を向いて黙っている。しばらく見ていて、見覚えのある男であることに気がついた。何をしているんだろうとかれは

思う。短いスカートの高校生女子は、三人でかたまつて話しているようだが、ときどき腕を振って、脚もステップを踏み、踊るようなポーズをとっている。ダンス部の練習だろうか。それとも、体操？ 向かいの線路を走ってきた電車に、かれらの姿が遮られ、もうそれ以上、見ることはできない。かれは自分の髪の毛をととのえようと、指の先でかきむしる。

その日は三両目に乗りこんだが、女子はいない。女子がそこに乗っていないことは、めつたにないことだった。青年もいなかった。いつも女子のもたれている扉のそばには、夏の陽射しが落ち、鼠色の床が淡いオレンジ色に変わっている。

かれは少し迷ってから、その陽射しのなかに身を浸した。そして、女子がいつもやっていたように、もたれて、鞆から本を出し、読み始めてみた。

何か字の詰まったものを、と思つて買ってきた、太宰治の本だった。かれは太宰治を名前しか知らない。フェアをやつていて、帯が巻かれていたので、めくつて字面で決めたただけだ。

一ページ目をめくると、四ページ読んだところで、もう読んでいられなくなり、顔をあげる。本の内容に気持ち動かされたのではない。窓の外からぶつかってくる日光で、本が白く光を放ち、かれの目を刺激したのだった。目の奥に軽くしびれるような感覚が残る。車内の像、ゆるる吊革や、席や、乗客たちが、黄色がかつてうつつている。

女子はこんな西日のあたるところで、本を読みつづけていたのだ。どうしてこんなところで本が読める？ かれの目は、細かい埃が揺られて漂うのをとらえた。額を拭くと、腕の産毛に汗が付き、列になって、ぎらついて

光った。背中からも熱が伝わってくる。冷房のきいた車内で、そこだけ、夏の夕方の、燃えるような空を、そのまま受けつづけるのだ。女子はそれを、受け止め続けていた。かれはまた本に目を向けた。

青年と女子が同じ車両で本を読んでいる。ずれてきた鞆を肩にかけ直す女子。吊革を握った腕から、青年の手首がのぞいている。青年がくたびれた本のページをめくる。女子もページをめくる。周りには、二人と同じ色の制服を着た男女が何人か座っている。

青年は次の駅で降りる。会話は無い。目配せもない。女子はまだ本を読んでいる。周りの女子高校生たちが、携帯電話を見ながら、肩を寄せ合っ
て笑っている。大きく脚を投げ出して、眠りこけているものもある。女子は
まだそこにおいて、本を読んでいる。おとなしくページをめくる。

かれは自分の目が、焼けつくように痛むのを感じた。次々に高校生たちが、
電車を降りていく。別の高校生の一団が、席に座り、あぶれた者は、
女子の周りで喋っている。ただしみな、射している光が目に入ってくるの
を、避けるようにして。

かれはもうそれ以上、本を読みつづけることはできなかった。まぶたに
涙がにじみ、何度もまばたきをした。文字など追っていられなかった。女
子はその電車に、もういない。どこにもいない。

まったく知らない高校生の集団を乗せて、ほどなく消える夏の光のなか
を、電車は走っている。停まっては、走りつづけている。

【了】